
幽霊が異世界へ

ひらがな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽霊が異世界へ

【Zマーク】

N4797U

【作者名】

ひらがな

【あらすじ】

少し無口で、真面目な少女、清子は幽霊だ。何をしようとしても透けて、傍観しかする事の出来ない幽霊生活も、幾分か経ち、大分なれた様な気もしないでもなかつた。そんな清子が、異世界トリップを果たした。幽霊のままで。さて、どうしましょうか。

プロローグ

一本一本が寂しそうに見える電柱。緩やかな傾斜に群生するコスモス。

闇夜に響く牛蛙の鳴き声。眼下に広がる田園風景を、煎茶を啜る気持ちで私は見つめていた。

私が幽霊になつてからいくらか経ち、この生活にも飽き飽きしていた頃に、
その転機は訪れた。

*

外れの田舎から都会の中心部に至るまで、道のりは短い。都会といえど、ビルやマンションが数本突き出しているのみとなつていて、他は特に何も無かつた。

昼間は学校や仕事で人通りは極めて少ない。ここにある歓楽街からも活気は見られなかつた。

それが夜になると、酔っ払ったサラリーマンや、大学のサークル仲間で盛り上がる

血氣盛んな若者に溢れ、お祭り騒ぎになるのが定番なのが。

ふと扉すり抜ければ、夫婦で雑談している店や、清掃に励む人の姿が多く見られる。

適度な位置に設置された街路樹に、うぐいすが止まつていた。

私は幽霊特有の浮遊で、うぐいすを観察しようと試みる。どんな物質にもすり抜けてしまう

私の体は、今となつては都合が良い物となつていた。

——ほどよく装飾された麦色の毛に、緑茶のような毛がふわふわと盛り上がつていた。

また鳴き声も素晴らしい、私は数分そこに立ち止まり、感嘆の溜息をはく勢いで、じつと見つめていた。

葉から零れる光にうぐいすは当たり、より神秘的で和風な雰囲気が醸されている。

歡樂街は静寂といつていよいほど静かだった。

以前私が住んでいた家は、今は父と母が住んでいる。そんな父母も、歳を増すことに、皺の数がだんだん増えていった。今年で還暦になり、生活も安泰しているらしく、気性の荒かつた父も、穏やかになり感情の起伏が少なくなつた。

私の部屋は少し遺品が残つていて、勉強用のノートは小さい文字で「清子」と書いてあつた。私の名前である。

緑の床に囲まれ、縁側で茶を啜るのが私は好きだ。今はそんな事は出来ないが、死ぬ前にも一度、飲んだ覚えがある。微かに動いている動物の動きの音で、どれだけ癒されただろうか。

そんな回想をすれば、眺めていたうぐいすは、私に田を合わせた。

じーつ。

はてまでこのうぐいす、私が見えるのだろうか。靈感が強い動物は多いと聞いた事がある。

うぐいすはそのつぶらな瞳を私の田に合わせ、甲高い声で鳴いた。

それは断末魔の叫びのようであり、威厳を示すものでもあるようだつた。

なにかおかしくないか？

鼓膜で何かが響いている。あの甲高い声が耳の中で反響しているように感じた。

声は耳を伝つて頭にがんがんと響く。頭が痛い。幽靈にも痛みがあるのだと新たな発見に嬉しさを感じている場合ではない。痛い。脳内を抉られるような、貫かれたような痛み。

特定の波長でその痛みは襲つてくる。

痛い。

痛くて、痛すぎて私は目を閉じた。眠る事のなかつた私の思考が、今眠つたような気がする。

私の意識は、暗闇に突き落とされた。

プロローグ（後書き）

「指摘があればよろしくお願ひします。

1 初めての異世界

気づいたら異世界に居た。

異世界だと気づいたのは、私の勘と、この景色である。

残念ながら行方不明にはならない。何故なら私は死んでいるからである。

何を触ろうとしても透けてしまうので、何も出来ないといつても過言ではない。

ただ唯一、私のできる事と言えば、浮遊と、通り抜けぐらいだろうか。

もちろん自分の体を見ることが出来る。火葬の時に着せられた白っぽい着物を着ているし、髪の毛だつてすちゃんとあるのだ。ただし、正確な色は見ることが出来ない。全身が薄紫っぽく見えてしまふ。

相手に見える事はない。

目の前には大きい幾つかの三角屋根が突出した城がある。どうやらここが中心地らしく、周りは警備兵が槍を持って囲んでいた。

城は城らしく、頂点には国旗らしきものがたなびいている。

反対方向を向けば、城下町が広がっていた。レンガ造りの建物が大半で、教会

らしき突き出た建物がぽつぽつあった。人も居たが、ひしめきあつてゐる事は無かつた。

中世ヨーロッパの様なイメージの町並みである。

人種は「アジア系」や「ヨーロッパ系」「ラテン系」「アフリカ系」と、地球と同じで豊富そつだが、あくまで肌の色だけらしく、皆彫りが深かつた。

どうやら異世界でよくある「自分だけ浮いてしまつ」といつ事態はありそうだ。

黒髪黒目の人もいたが、少し心配である。

城下町に近づけば、意味の分からぬ罵声が聞こえてくる。一角の店に入だかりができていた。

「 a k r g o i g J e a 」
「 a r a g g s b .J 」

残念ながら、言葉は理解できない。多分競りだらうと思う。二人の男が何かを叫んでいて、ざわめきがたびたび起きていた。

それを横目に流し、私は城下町を突き進んでいった。
とりあえず、現状把握がしたい。平常心を保つてゐるが、内心ヒヤヒヤしているのだ。何かの餌食にされたら嫌だなあ。

それにしても、不思議な所だと思つ。

もちろん海外旅行などもしたことは無いし、日本の住宅は形もまばらで、たまに建っている豪邸を眺めるのみだ。しかし「なぜどうだりうつ」か。何というか、調和している。ここでの雰囲気が、ファンタジーのイメージと直接結びついてしまうのだ。

人々が着ている服はかなり洒落ていた。派手に腿を露出した若者もあるし、耳や鼻にピアスを付けている者もいた。どちら化粧もあるらしく、いかにも厚く塗った様な感じの人もいる。

今の現状で分かった事は、

- ・言語が違う
- ・元居た世界と違う

ぐらいだろうか。

言語も、英語とはインтонационは似ているが、習得しよつても難しい。

さて、どうしようかと悩んでいると、近くにたむらしていた子ども達が目に入った。

「 ouen r goainb！」
「aoeruhnn goe...」

口調と雰囲気から見て、喧嘩だわい。やまつじつこいつ物には興味そそられるといつものだ。

「 a e t o b i - c o a - .」

(「うめこ、黙れ！」)

訳すとやういった感じだらうか。

「 o a n g - e - a w e q u a r t e r - o - t - .」
(ちゅうじ、喧嘩はやめなよ)

近くにいた女の子が止めに入る。

「 o u e a n r u b e n - a - o - h - o n u n a
(お前はひつじなんだー。)

子どもらが女の子を遠ざけた。

「 o u n a o w e q u a r t e r - .」
(何やつじるんだー。)

止めに入ったのは野太い声を出すオジサンだ。

「 o n a o u r n a - .」

(お前達、謝りなさい)

やうなると、子ども達は謝あらわしをえない。しんみりとした雰囲気の中、

一人の男の子が謝ると、それに勢いをそそられ、他の子ども達も謝りだした。

—— もしかしたら、この意訳で言語習得を出来るかもしれない。

私は微かな期待を懷に忍ばせながら、情報収集にますます意気込んだ。

「 o e . j u n v b o a e n 」

やはり、無理だ。井戸端会議を開いている女性達の会話は高度な技術を用いていた。

会話つて、こんなに難しいものだつたとは思わなかつた。

意訳は相当厳しいらしい。何せ、単語の意味さえ分からぬのだから。

幽靈なので、生活ややりくつは出来ていけると思ひが、楽しさが無いと少し鬱になりそうで怖いのだ。

という訳で思案した結果、『学校』を探す事とした。

もしかすれば、と少しの期待と妄想で、学校ならあるのではないかと思つた次第である。必要となれば、多分言葉から留りつであらひ、初当科から不法で学んでしまえばいい。お金なんて払わない。

だが少し心配である。景色を見れば、車や自転車は無く、手押し車を木製にして

大きくした様な物はあつた。荷物を運ぶものらしく、大小様々だ。兵士もいたし、稀に

鍬や鎌を担いだ農民さんもいたので、農業用の大型機械はまだないらしい。

となれば航空機も飛んでいる筈はなく、まだ発達途上といった所

だろうか。

見ればボロボロの布切れを前と後ろで結んだような人もいた。それは正反対に豪華な冠と着重ねしたドレスを纏っている人もいる。階級は何処にでもあった。

こういった場所に『学校』なるものは建てられているものなのだろうか。

繁華街、歓楽街、等と城下町を一巡してから、この辺りの雰囲気とは違った機械的な建物を見つける。長方形のガラス張りになつてゐる建物だ。中心には、四方八方ガラス張りになつた球体が抉りこむ様にして、長方形の建物と一体化していた。

長方形の建物の眼下には、日本であるような学校の運動場が広がっていた。遊具はその日本の物と酷似していて、ブランコ、登り棒、ジャングルジムまであつた時には唾然とした。

運動場はその本体の建物よりも大きく、柵に囲まれた池まであった。

そしてそこに掘つて遊ぶ幼児ら約100名以上。皆陽気な声を出し、それぞれが固まって遊んでいた。中には幼児達が上半身裸でふざけて遊ぶ姿もあつたが、生憎私にはそのような性癖は持ち合わせていない。誠に残念である。

もしかして「」、幼稚園とか。

高等部まで一応学んできた私が、幼稚園から学びなおすなんて、何て素敵。

チートし放題で最高！と思つていたら、あらら幽霊でした残念、なんて少し落ち込む。

キーン、コーン、カーン、コーン

鐘の鳴る音で、幼児達はガラス張りの建物に駆けていく。私もその幼児達の後を追いかけた。ガラスの開け放しの扉を幼児達が駆け抜け、下駄箱から上履きを取り出し履き替えた。とたんに幼児らがちりぢりになる。

階段を上がる幼児や、そのまま廊下を駆ける幼児など、様々である。

どうやらそれに教室が分かれているらしい。
ここがこの世界での、「幼稚園」と見て間違いないだろ？

下駄箱から左手に曲がり、歩いてゆけば職員室があつた。教員達らが飲み物を飲みながらアンティークな椅子に座りくつろいでいた。

下駄箱から右手に曲がると、教室があつた。絵札毎に教室が分かれており、「桃」や

「薔薇」などの単純な絵札ではなく、「龍」や「炎」などの繊細な作りの絵札が教室の前にかけられていた。

試しに「炎」の絵札が入った教室に侵入してみれば、中は静寂に包まれ、幾つかの長机に肘を置いた幼児らが、前にいる講師らしき人物を真剣に見やっていた。

ボツ！

教師の手から小さな炎が浮き出る。

幼児達はそれぞれ感嘆の声をあげた。真似する幼児もいれば、恐れて泣き始める幼児

もあり、講師は困った顔をして注意の言葉を投げかけている。

私はすぐさま教室を出た。

まさかここが、ファンタジーの世界だつたなんて！

2 初めての幼稚園（後書き）

下手ですが、宜しくお願ひします。

一瞬、言語習得やらは諦めてしまおつかと思ったが、やはり諦めきれず教室の扉の前で呆然と立ち尽くしていた。幽霊人生にも抑揚が欲しいし、噂話で少し楽しんでみたい感じもあった。

どういう訳か父母も心配である。私なんぞは居なくなつても、居ても気づかれないので。やはり寂しさは残るらしかった。

ガラス張りの建物の中は、日本の病院の様な雰囲気だ。廊下の左右の壁には手摺が付いていて、教室側の壁には掲示板が設置されていた。

上の階はどうだか知らないが、この一階は一つの大きなフロアになっていた。

廊下も、教室側には壁が上から下まできつちりあるのだが、反対側は、子どもでも背伸びすれば向こう側が見えるぐらいの、少し低めになつた壙になつていて。

お蔭か、電灯やらを使用しない設計になつていて、外からの光で、ここ全体の明かりを担つているらしい。雨が降つたときはどうするのか知らないが。

先程の炎は忘れる事として、少し一階のフロアを探索してみた。

まずは下駄箱。縦には無いが、横には広々とした下駄箱が、數十

個縦に並んでいた。

縦にないのは、背の低い幼児への配慮だらうか。それでも近くには踏み台であるう木箱が置いてある。そしてそこを左手に行けば職員室、保健室、会議室、給食室、などとこれまた一つ一つが大きい。

下駄箱から右手には、教室が並び、その奥を行けば、運動場と？
がつてている。

何よりも、天井が高い。大人の男が3人程縦に連なつても届かないのではなかろうか。

下駄箱から直線を歩けば階段。そして2階は広々としたプレイルームが併設されており、そこにもまた遊具があった。横には教室があり、4階まであるが、同じような感じなので、割愛する。

適当に教室巡りをした。やはり絵札はそれぞれの教室ことに異なつてゐるらしく、

他にも『氷』『女神』『雷』『草』のような感じで様々である。

思つていた事だが、この絵札は、『属性』の様なものを象徴しているらしい。

『氷』の教室に入れば、講師は色々な所から『氷』を出したり、『女神』の教室に入れば傷ついた兎を、治癒している場面も見られる。

最初の炎を見たときは、言つまでも無く驚いたが、こんな超常現象を見てみれば、

次第に慣れてくる。適応能力は便利だ。

3・4階にあつたのが教室で変わりないが、此方の方は『体術』やら『剣術』を習得するらしく、女の幼児より、男の幼児の方が比率としては高かつた。

まさに『剣と魔法』だ。

そして、言語習得の為に発掘できた教室もある。

『街』の絵札が描かれた教室だ。

相変わらず講師が何を語るとしているのかは分からぬが、この教室にいる幼

児達も、講師の言つ事は理解していないらしく、私と同じ状況に陥つてゐるようだ。

カーペットの上に正座した幼児らが、それぞれ思い思にふざけまわつてゐる。

小規模な学級崩壊になつてゐる中、私は一人の幼児の横に座つた。赤毛で、猫目の

少女が熱心に勉学に励んでゐる。だがこの少女も、講師の言つてゐる事はちつとも理解していないらしく、首を傾げるばかりであつた。

それぞれの幼児らに配られたプリントには、文字と見られる物が大きくプリントして

ある。よく見る文字の練習プリントだ。藁半紙の薄い紙に、少女が熱心にお手本の文字を摸写していた。

アルファベットとかなり似ている。文字がだ。例えば英語の『A』はこの世界の文字になると、『A』の真ん中の横線を無くした物になり、『B』となると、横の一線を無くしたような文字になる。

全種類で26種類からなる文字を、組み替えて単語を作るらしい。法則はまだ見切れていなが、こうなれば習得の歩みも大分近くなるのかも知れなかつた。

講師が人が喜んでいる様の絵を書き、少しあやしい感じの発音を口にする。その発音を真似し、幼児らが口ずさむ様にして発音した。これは『喜ぶ、幸せ、満足』の様な意味を持つ、英語での『happy』と同じ意味を持つものらしい。

私は次の休み時間の鐘が鳴るまで幼児らと、単語の勉強に励んだ。吸収性の高い幼子らの脳と違つて、私の脳内はちょっとばかし硬くなつてきてるのでかも知れないと思い、少し焦りを感じる。

授業の終わりを告げる鐘が鳴ると、幼児らは跳び、はしゃぎながら意気揚々と教室を出て行つた。

私の横に座つた赤毛の少女は、長机に肘を付きながら、まだ勉学に励んでいる。

その少女と共に、文字を私は頭に叩き込んだ。

多分・・・・・・文字に関しては大丈夫だろう。

あとは単語と文法か。

そう思いながら、私は片面ガラス張りの教室を見上げた。

赤毛の少女は、熱心に顔を机に伏しながら、羽ペンを用いてプリントに書き込みを行っている。自分が小さい頃は、もつ少しだらけていたと思う。

閑散とした教室に、講師と少女だけが残っている。辺りは沈黙に包まれ、先程までの

盛んな雰囲気は一つも感じ取られなかつた。

講師は、前の長机を陣取りながら、幼児らのプリントの丸付けに励んでいる。

少女も少女で、熱心に書き取りを行つていた。

外はまだ明るく、教室内も電灯を用いるより大分照らされていた。少女は廊下側の長机で、講師はその前の長机でそれぞれ作業を行つている。

「openhounbaon」

空が赤く染まる。

講師が少女に声をかけた。どうやら「もうそれもう終わらないか」との事らしい。

少女は一瞬怪訝そうな顔をしたが、講師の言つ事には逆らえないもので、頷くと

そそくさと帰宅の準備を始めた。

ガチヤン。

講師が誰も居ないか確認をし、扉を閉め、鍵を掛けた。

辺りは静寂に包まれる。鉛筆の音一つ聞こえりやしない。人通りはあるらしく、時折

外から咳払いや足音は聞こえるが、特に変わった事は何も無かつた。

壁をすり抜ければ、電灯が無い為だろうか、廊下は初めて来た時より、大分暗くはなつていて。それ程困る事でも無いが、時間が経てば、数メートル先も見えなくなるだらう。

他の教室も閉まっているらしく、人の気配はもう無い。

職員室に行き、お礼という事で一礼をしておいた。職員室は賑やかだ。

今日一日、ありがとうございました。
明日も来ます。

すり抜けと浮遊を繰り返し、城下町まで戻る。

夜になるにつれ、城下町はより賑やかになつていった。昼間、仕事の鬱憤を溜めていたのか、頬は少し赤くなり、ふらふらと蟹の様に歩く酔っ払った人がいる。

私は私で、城下内の店を見て回つたりした。煌びやかに光る宝石を眺める少女も居たし、文房具屋で、鉛筆代わりであろう筆が、数え切れない程置いてある所に親子が品定めをしている光景も見られた。

総菜売り場には、カレーの様な液体も売られていたし、カマキリ等の昆虫類を炒めた、
昆虫炒めなる物が売られていた。

魚屋にはカラフルな色の魚が売られている。マグロの様に巨大な魚もおれば、おたまじゃくし程度の稚魚もいた。自ら発光している魚もいて、少し気分が悪くなつた。

八百屋には、かぼちゃとバナナを足して2で割つた物が売られていた。

かぼちゃの様に硬い表皮と、バナナの湾曲部分が組み合わさり、中は熟し黄色だが、

表面は緑色と奇抜な野菜になつていた。

主食は米らしいが、色が黒っぽく、何より皮に覆われていた。もちろん、芋やにんじんの代替の様な野菜も売られているし、形は変だけれど、果

物もちゃんと売つてゐる。

夜になると、店それぞれが灯を用い、街全体に美しい景色がともつた。

人々はおしゃいへしあいしながら、それぞれ買い物を楽しんでいる。

景色は闇に更け、やがて人通りも少なくなつた。店の灯が消され、視界は見えなく

なる。

朝になるまで苦痛だ。体が眠りを必要としない為か、体が無い為か、どんなに目を閉ざしても意識は無くならない。

やがて日が差してくれば、城下町にも活気が増してくる。少なかつた話し声も増えてきて、小さい声が大きな声になつた。布で閉じられた店が開き始め、辺りは盛況した。

私は朝になつたので、なんとなく幼稚園に向かう事とした。

*

「ounce, o'clock another boy
(みなさん、お早づけありがとうございます)

「o-iagog a n e r og

(お早づけありがとうございます)

こんな感じだらうか。運動場に幼児らが整列し、髪の毛のくせいい男性が朝礼を行つていた。比較的幼児らの数は少ない。『街』の教室にも数十名しか居なかつたけか。

クラス単位で分かれ、整列している故、幅広く場所を取つていて割には、縦には幅は狭かつた。

周りを見れば、所々に泣いている幼児や鼻血を出している幼児はいて、日本の幼稚園と変わらない感じはして、親近感が沸く。

でも魔法の世界な訳であつて、日本では無いのだが。

幼児らの隊列の横に佇んでいた教師が、暇潰しを始め、魔法を使い、落ち葉を浮かせたりしている。近くにいた幼児がそれに気づき、さやあさやあと嬉しそうな声をあげた。

それに気づいた朝礼を行つてゐる男性は、咳払いをし、早々に朝礼を取り止めた。

教師はバツの悪そうな顔しながら、幼児らの誘導を始めた。

私はガラス張りの建物をすり抜けしながら、『街』の教室に入った。後から幼児らの喚声がすぐそこまで聞こえてくる。

*

いつもながらに、赤毛の少女の横に座つた。少女の席は廊下側の一番後ろ、隅っこである。

やっぱり、隅っこで落ち着くよな。

今日は自己紹介しき物を習つた。講師が一人いて、同じ言葉を繰り返していたし、文法でも英語のそれと似ていたから間違ひ無いと思つ。

午前は文字と自己紹介の勉強だったが、どうやら午後は配給の食べ物を食べ終わつてから、イベントがあるらしい。

幼児らは鞄の中に雨具とお菓子を詰め込みながら、喚きちらして教室内を走っている。

赤毛の少女もこれには嬉しい様で、ウフフと笑いながら幼児らの戯れに参加していた。

講師らに誘導されながら、運動場まで行き着くと、門を出、城下町を出、草原に集合した。他のクラスの生徒もいるらしく、合わせ50名程度が草原に集まっている。

講師がパチン、と手を鳴らせば、幼児らが歓声を上げじやれまわり始めた。

あつという間に、傷一つなく、綺麗だつた草原は、踏み荒らされ、辺りの雑草は萎れてしまつ。

呆然としながらそれを見ていれば、幼児らと一緒にじやれまわっていた赤毛の少女が誰の居ない方、私の方におれるおれる近づき、

「わたしはエイミです」

と愛らしく放つた。エイミと名乗つた赤毛の少女は、居もしない此方の方を見据えている。私と少女の目の焦点はぴつたりと合はせられ、少女は首をくくること曲げながら、「血口紹介」と無言の催促をしてくる。もしやこの子、私が視えるのだろうか。

「わたしはきよひです」

たゞたゞしく綴つた言葉は、いかにおかしく見えただらうか。

「よひしくおながいします」

エイミはやうに言ひながらペココとお辞儀をした。エイミは、私が來た時から眞づいていたのだろうか。いや、それは考へあるまい。もし眞づいていたのなら少し前から声を掛けられていた筈だろ?といふ。

「これからは、おともだちですか」

いつもと笑いかけてくれた。私達は、ちよつぴり変な出会い方をし、可笑しく思いながら、一人でくすくすと笑つた。

ふんわりとしたワンピースを着こなす赤毛の少女エイミと、友達になつた!

あれから数日。

赤毛の少女エイミーとは度々話す関係となつた。当人は私が幽霊だと言う事を認識していないらしい。もしくはその様な概念は無いか。どちらかだらう。こちらも完璧にこの地域の語を話せる訳では無い為、「おはよう」や「こまます」「セヨウナリ」等の簡易な会話のみとなつた。エイミーとしてはその会話が樂しいらしく、面白みの無い会話にクスクスと笑い声をあげながら相手をしてくれた。

エイミーと話すのは、誰も居ない廊下か、騒いでいて自分達に気づきそうにない教室かである。私がそのような存在ではない事を察知しているのか、それは分からぬが、「友達の紹介」等といって、誰にも見えない私を広める訳でもなく、程良い関係が続いている。

此方としてもそれは楽だ。介入される訳でも、特別べつたりとくつづいている訳でもないし、ここで初めて出来た友達に全てを打ち明ける度胸も根性もないのだけれども。私はエイミーを『語学の勉強』として良じよつに扱つているのだろう。薄情な奴だ。

やつじえぱぢ「して語学について学びたくなつたのか。その目的は曖昧だ。

充実した生活を送りたいと言つても、生きている訳では無いし、他人との交流も少ない。今まで誰にも気づかれた事はこれと云つて無く、ハイミと出会えたのは奇跡といつものである。

*

「あなたになまえはなんですか？」

「わたしのなまえはキヨコです」

「よくできました」

「あなたは、あさおきてからせこしょになにをしましたか？」

「お顔をあらいました」

「そうですか」

またまた一ヶ月。基本的な会話や相槌など、繰りつく様にして学んできた。

ハイミとは、近くで遠い様な微妙な関係が続いている。こちらのことは嫌っている様子は

無いし、大丈夫かと思つて安堵している。嫌われるのは嫌だ。苦痛だ。たとえ、未発達

な子どもや、常識の無い人に嫌われたとしても、地獄に落とされたような気分になる。

自分が、相手を嫌うという事は余り無い。潜在意識として、やつ

ぱり無理だ、と思つ

事は度々ある。そういう感情を表向きにすれば、人間関係が崩れる事は見え見えだからだ。

生きている間の時、友人に、『清子つてさ、いい子ちゃんぶつてるよね』と言われた

事がある。その時は笑つて受け流したが、内心怒りで爆発しそうになつた。

ではそういう怒りを表沙汰にすれば、その友人はどう思うのか。『嫌な奴だ』と

思つて関わらなくなるのか、自分に気持ちを突きつけて嬉しい、と思うのか。

陰口は言わない、とりあえず笑つて受け流す。これが私の基本理念であり、最後に行き着いた答えだ。結局の事いうと、『これが一番楽だ。』

少し話しがずれてしまつたが、私は語学勉強を続けようと思ひつ。とりあえず文字は

読めなくとも、会話は完璧にしたいし、エイミーはこれからも仲良くしていきたい。

好奇心ではあるが、魔法も見てみたい。・・・・・あと、使ってみたい。

生きたままトリップ出来ればなあ、と少し悔やみつつ、エイミーと簡単な会話をしている。私よりエイミーの方がこの世界の知識は豊富だ。エイミーは私の事を「キミさん」と

呼んでいる。私は、普通に「ハイミさん」と呼んでいるが。会話は基本的に「あなた」だけれども、心持名前呼びだ。

名前にはだ名を付けるのは何処でも変わらないらしい。『街』の教室の中でもそのような事例がある。頭が丸刈りになつている子は、「つるつる」と呼ばれるし、体格が大きい子は「肉ちゃん」と呼ばれている。今日もつるつると肉けやんは元気だ。

「キヨさん。明日も、元氣でね」
「ハイミさんも、お元氣に」

授業を終えてから、幼児らは引率者に連れられ帰つて行く。
私は幼児らが帰つてからといつもの、特に何もせずにだらだらと過ごしている。

この幼稚園には図書室はあるのだが、触れないで読めないし、それでは何の勉強にもならない為、職員室に入つて聞けるだけの会話を盗み聞きしたりして暇を潰していった。これでも意外と勉強になるものだ。

ついでに言つと、ハイミは今年で4歳になるといつ。将来有望の美人さんである。

あ、私は19で死んでいるのが大分経つているので、精神年齢で言えば、三十路に差しかかるうとしている所ではなかろうか。曆は気にしていなかつた為、正確な年齢は分からぬけれど。

異世界に来たからには、何かやつてみたり、働いてみたりしたい
んだけどな。

「もしよかつたら、一緒にかえりませんか?」

エイミの顔は夕焼けに照らされ、少し陰りを帯びていた。それが顔の彫りをはっきりさせると、少し羨ましくもあつたが。

そう声を掛けられたのは、今日の授業が一段落し、エイミの血瘤が終わった時だった。

私は久しくエイミを外まで送りつとつこていった矢先、そう告げられたのだ。もちろん、困る事ではない。いや、むしろ嬉しい事だ。だが、それ以上近づくのは、何か不吉な予感がしないでもない。だめだめだ、そう考えると本当に何か起きそうで怖い。

私は、頷いて返事を返した。エイミは嬉しそうに顔を綻ばせ、じやあ、一緒に行きましょ

う、と返事を返してくれる。エイミの赤髪がふわふわと跳ねた。

幼稚園の正門を出ると、馬車の前に立つた侍女らしき人がそこで立往生していた。少し心配そうに、頬をだらつと下げながら踊る様にして周りを見渡している。

「エイミ様!」

侍女らしき人はそう声を張り上げると、駆け寄りエイミーの一、二歩前で止まる。深いお辞儀を一回すれば、「いらっしゃへ」と言つてエイミーの背中を押した。

少し困惑しながら私が往生していれば、エイミーは私を手招きした。ついてこい、という意らしいが、些か不安である。まさか馬車にまであがらせて貰えるなんて思いもしなかつたのである。

馬車で幼児を迎えて来る人は少なくはない。もちろん金銭の余った上流階級の者だけであろうけれど、その数が多いということは、エイミーはお金持ちさんが多く入学する所だつたりとかしちやうのだらうか。普通の子どもは毎晩普通に城下町で歩いていたりするものだし、その可能性も否定できない。

馬車の中は、意外と地味めの配色がなされていた。ベージュの壁に、少し凝つた金の龍が描かれている。あと、意外とよく揺れた。城下町の外れにある幼稚園から出て、城下町の周りを回る様にしている。道路が整備されていない為、ごつごつした急峻な坂と出会つた時は縦に横にと馬車が揺れ、侍女が慌ててエイミーを抱きかかえる。

そんな事が何回か続いた後、漸く馬車が止まり、扉が開けられる。

エイミと侍女は

少し疲れた顔をしながら、馬車をのつそりと降りていった。私も後ろからついていく
と・・・・・あれま！そこには始めに見たあの大きな城があつた
ではありますか！

三角屋根の突出したあの、レンガ造りの城が、目の前に迫ってきていた。

三角屋根の上部分には、少しこなつた太陽がここにちはしてい
て、地面が黒と赤
に帶びていった。門前にいた兵士らがエイミに深々と礼をし、エイ
ミと侍女を通して、
いつもの警備に戻つてゆく。

城に入れば、床は紺色の絨毯が一列に敷かれ、そのカーペットを
挟み込む様にし
て、鎧と剣を被つた銅像が君臨していた。天井には、縄を被せた電
灯が薄ら明かりを出
し、少し神秘的な雰囲気になつてゐる。壁に描かれた読み解けない
文字が、螺旋状にな
りながら、向こうの通路へと続いていた。エントランスに入ると、
幾つかの階段がある。
その一つを侍女とエイミは登つていった。

どうやら、エイミはお嬢様だったようだ。

困惑した感情と、急展開になつた驚きを顔に出さずに、侍女らに
付いていく。

階段を出れば、廊下だ。そこにも緋色の絨毯が敷かれていて、その上を優雅に侍女とエイミは歩いて行った。一つの扉を侍女が開ければ、吸い込まれる様にしてエイミはその中に飛び込んだ。

「つかれました！」

エイミはそう叫び、程よく装飾された部屋を飛びまわった。日頃の勉強に鬱々していた

のだろう、寝台の上で飛んでいる。

侍女が注意を呼びかけていたが、エイミは「自分のお部屋だからいいもん！」と意地を

張り、微笑ましい光景を見せてくれた。

部屋は、寝台、遊具、勉強机が置かれた少し狭めの部屋になっていた。デザインもシンプルで、幼子なら、桃色や、黄色などを好みそうなのだが、茶色と白の目に優しい構成になっている。

侍女が溜息をはきながら、音を立てずに部屋から去り、それと同時に、エイミの騒ぎは収まった。寝台の軋む音を聞いてから、エイミが床にぺたんと座る。

「キヨさん、おひり、ないんでしょ？」

エイミが心配した表情で言つと、じう続けた。

「だったら、ここで泊まつていってよ」

ハイミがにかつと笑う。綺麗な歯茎と整った歯が丸見えになつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4797u/>

幽霊が異世界へ

2011年10月8日22時04分発行